え顔のための三十一センチ

小・3　足立　すみれ

「わたしのかみの毛、どこへ行くのかな。」

世界には病気で苦しんでいる子がたくさんいます。わたしは、少しでもその子の役に立ちたくて、二年生の終りょう式の数日前に、ヘアドネーションのためかみの毛を切りました。夏はあせもができ、冬はかわくまでに時間がかかるので、家族からは、もう切ってしまっていいんじゃないかと言われることがありました。それでも病気の子のためにのばしました。

そんな時、「三十一センチの約束」という本を読みました。それは、ヘアドネーションをした後のことです。わたしは、なぜ「三十一」という細かい数字なのかふしぎに思いました。「三十一」という数字は、ヘアドネーションができる一番短いかみの毛の長さです。白血病のゆいのために、親友のサラはヘアドネーションをすることに決めました。サラのかみの毛で作ったウィッグをゆいがつければ二人とも幸せになれると思っていましたが、一人分のウィッグを作るのに、何十人分ものかみの毛がいることを、わたしははじめて知り、おどろきました。

病気でつらい思いをしている人の中には、かみの毛など当たり前のものをなくした人が、たくさんいると思います。しかし、その悲しさは、ゆいのようにかみの毛をなくしたことのないわたしには、とても想ぞうすることができません。ですが、わたしもかみの毛をなくしてしまったら、お見まいに来た人に、かみの毛がないことをどう思われているか、もう自分のかみの毛は一生はえてこないのかふ安に思ってしまいます。でも、ゆいはそんなふ安や苦しさを乗りこえていました。サラのかみの毛で作ったウィッグを待っていたからだと思います。二人はおたがいにしんじ合っていたからだと思います。こんな親友、わたしにもいたらなあ、とうらやましく思いました。

ゆいが白血病になったのは悪いことだけではありませんでした。サラがヘアドネーションをすることで、二人が強くなりました。そして、ゆいの両親、サラのかみの毛が使われたウィッグをつけている子など、たくさんの人によろこびをあたえたと思います。

まだ世界には、かみの毛をなくして悲しんでいる人がたくさんいると思います。わたしの短いかみの毛がまた長くのびたら、ヘアドネーションをして、「え顔のための三十一センチ」にちょうせんしたいです。